

アマリリス Amaryllis

静岡県立美術館 ニュース

THE JOURNAL OF SHIZUOKA PREFECTURAL MUSEUM OF ART

rain (rān), *n.* [AS. *regn*, *rēn*, = D. and G. *regen* = Icel., Sw., and Dan. *regn* = Goth. *riġn*, rain.] Water in drops falling from the sky to the earth, being condensed from the aqueous vapor in the atmosphere, esp. as seen in the form of clouds (as, “Aquarius . . . from each ample fold Of the clouds about him rolled Scattering everywhere The showery rain”: Longfellow’s “Rain in Summer,” 68); the descent of such watery drops (as, “the tender grass springing out of the earth by clear shining after rain”: 2 Sam. xxiii. 4); a rainfall, rain-storm, or shower; specif., *pl.*, the seasonal rainfalls, or the rainy season, in some regions, as India; also, *sing.*, a quantity of anything falling in the manner of atmospheric rain, or a falling or descent of something in this manner (as, a *rain* of tears; a *rain* of flowers or of bullets; to invoke a *rain* of blessings upon a person).

©Joseph Kosuth / ARS, New York / JASPAR, Tokyo, 2017 C1668

ジョセフ・コース
一九四五—
（タイトルド、画）
一九六七年
アルミニウム、セラミックシルヴァープリント
二一〇×二一〇cm

黒い背景に白い文字で表された「雨」の定義。鑑賞しても美的な快楽が沸き起こり難い、実に簡素な作品である。作者は、コンセプチュアル・アートのパイオニアであるジョセフ・コースだ。芸術とは芸術の定義を問うことであると考えた彼は、絵具などの物質的な側面ではなく、作品のコンセプトこそが重要であるとし、文字や写真などを使って作品を制作した。本作は、作者にとって非物質的なものとされる「水」を取り上げたものであり、辞書から「雨」の項目が、白黒反転して転写されている。コースはこうした手法により、言語や概念について考えることを観る者に促している。本作は初期の代表的なシリーズの内の一点で、「芸術家と写真」展に出品された。

（主任学芸員 植松篤）

No.
127
2017年度 | 秋 |

展示室にいくつもの木像が並んでいることについて

館長 木下直之

影堂と呼ばれる特別な建物の中に安置されています。そこには限られた人しか接近できません。接近はできても見ることは叶わないことが多かったかもしれません。尊いものほどそうでした。

それが明治になると一転、木像は銅像に代わり、屋内から屋外の開かれた場所へと移り、誰もが間近に目にするようになることを、横浜の掃部山公園に建立された井伊直弼の銅像を手掛かりに論じたことがあります（拙著『銅像時代』岩波書店、二〇一四年）。

同じころに美術館や博物館が登場、そこもまた誰もが足を運ぶことのできる開かれた場所となりました。展示物を好きなだけ見ることが許されました。

今ではあまりにも当たり前ですが、見えませんが、展覧会では美術館が展示の自由（先の原則にいう「活動の自由」）を行使し、人々の見る自由（「知る自由」）を保障しているのです。この場所を大切にしたいと思えます。

前号のこの欄は「美術館の自由」に触れたところで終わりました。本年五月に全国美術館会議が採択した

「美術館の原則と美術館関係者の行動指針」は、それをこう謳っています。

「四、美術館は、倫理規範と専門的基準とによって自らを律しつつ、人々の表現の自由、知る自由を保障し支えるために、活動の自由を持つ」

これより先、二〇一二年に日本博物館協会が「博物館の原則／博物館関係者の行動規範」を公表したのですが、そこには「博物館の自由」がなく、何だか変だなどと思ったものです。日本図書館協会は、早くも戦後間もない一九五四年に「図書館の自由に関する宣言」（一九七九年改訂）を出しています。

自由は美術館・図書館に必要で、博物館には不要なのでしょうか。そんなはずはありません。

おそらく、博物館関係者は「表現の自由」を「人々」のそれに限って狭くとらえたのではないか。美術館においても、そう考える人が多いかもしれません。作品を出品した作者の表現を保障するものだ。

たしかに、すぐに思い浮かぶ出来事は、遠くは富山県立近代美術館の天皇の肖像カラージュ（一九八六年）、近くは愛知県美術館の裸体写真（二〇一四年）、もっと近くは群馬県立近代美術館の彫刻（二〇一七年）をめぐる問題です。いずれも、いったんは展示された作品に、館の外から内から何らかの力が加わり、撤去や非公開を求められたものです。

その顛末を詳しく語る余裕はありませんが、そこで問題になったことは、作者の表現の自由とともに、美術館の展示、という表現の自由です。

この夏から秋にかけて当館で開催した「戦国！井伊直虎から直政へ」展の会場を歩きながら、そんな「美術館の自由」について考えたのでした。世が世ならば、そこに展示されたものの多くは、私たちが見ることのできないものだからです。

とりわけ、今川氏親や井伊直親、直政の木像、今川義元に仕えた太原雪斎の木像（禅僧ゆえ頂相ともいわれます）などは、本人に似せた肖像であり、本人の身代わりとして祀られてきました。

直親像を所蔵する井伊谷（浜松）の龍潭寺がそうであるように、木像は厨子に納まり、さらに御霊屋や御



アプリの画面例1



アプリの画面例2

静岡県立美術館と静岡県立大学との デジタル分野での連携について

渡邊 貴之

静岡県立大学経営情報学部 准教授

去る二〇一六年十一月に、ロダン館内の作品の解説を目と耳で楽しむことのできるスマートフォンアプリ

「ロダン館ガイド」をアプリストアで公開しました。このアプリは研究室の学生たちと二〇一四年から試行錯誤を重ねて幾度も作り直して開発したものです。二〇一四年に開発し

た最初の試作版では、ゲーム要素を取り入れてクイズラリーなども盛り込みました。

当初、ゲーム要素は来館者の作品への興味をより惹きつけるのではと期待して導入しました。実際に、歴史・科学などの博物館では、展示物を通じてその背景にある歴史的・科学的教養が深まることを期待して、解説パネルなどを充実させておりアプリにおいてもゲーム要素をふんだんに取り入れています。しかし、ロダン館でのモニター調査や学芸員の方からのヒアリングによって、美術館では作品そのものが主役であり、作品鑑賞の妨げとなるようなゲーム要素は不要であるという結論に至りました。現在アプリストアで公開しているバージョンでは、ゲーム要素

を廃してより作品鑑賞に集中できる機能のみを提供しています。アプリは日本語と英語での表示に対応しており、音声ガイド機能も日本語と英語での再生に対応しています。音声ガイドファイルは、ロダン館内でアプリを起動すると初めてダウンロードできます。是非、アプリストアで「ロダン館ガイド」を検索してインストールし、館内で音声ガイド機能を楽しんでみてください。

このような県立美術館と県立大学とのデジタル分野での連携は、立地が隣接していることもあり長期間にわたり継続されてきました。二〇〇一年に開催された県立美術館の収蔵作品を対象とした「開館15周年記念ザ・ベスト展2001」では、私たちはインターネットを通じた投票

システムとバーチャルリアリティによる作品鑑賞システムを提供しました。二〇〇七年には、「ロダン館バーチャル体験システム」の導入に協力しました。公的美術館と大学とのデジタル分野での継続的な連携は全国的に見てもとても珍しく、大学の持つ知に対して活躍の場を与えていただき大変ありがたく感謝しております。

昨今、アートを活用した地域活性化やまちづくりが注目されており、美術館の地域における役割はますます重要になっていきます。昨年、JR草薙駅南口の愛称が「県大・美術館口」に決定しました。このことから見ても、県立美術館は草薙地域の芸術文化の拠点として、カラーコンテンツとして大きく期待されていることがわかります。私たちも、今、県立美術館や県立図書館と草薙地域の結びつきをより強めることのできるような新たなデジタル分野での取り組みを構想しています。

美しき庭園画の世界

—江戸絵画にみる現実の理想郷

2017年10月21日(土)～12月10日(日)

紅葉の美しいシーズンが到来しましたが、今年の秋の静岡県立美術館は、プロムナードにつづき、展示室も緑と紅葉あふれる空間に変身します。「美しき庭園画の世界」展では、江戸時代の美しい庭園画が、彩り豊かに皆様をお迎えます。

「庭園画」と聞いて、皆さんは何を想像されるでしょうか。耳慣れないこの言葉、実は、江戸時代の絵画史のなかで大きなジャンルに成長し、多くの人々に愛される作品を生み出しました。「庭園画」は、簡単に言えば、庭園を描いた絵画作品のことです。我々現代人にとって、庭園は日常生活の中で身近に

触れることのできる自然であり、ストレスフルな日々のなかで、自然とふれ

あい、リフレッシュできる大切な空間ですが、江戸時代の庭園は、現代以上に、人々にとって重要な場所でした。とりわけ、政治の中心地であった江戸

では、全国の大名が大邸宅を構え、こぞって広大な庭園を造りました。大名庭園は、將軍の御成の舞台になるなど、大名にとって、社交や儀礼の場として

も重要な意味を持っていたからです。そのため、江戸は千を超える大名庭園がひしめく、世界でも類稀なる「庭園都市」となりました。江戸時代には、現代の東京では想像もつかないほど、江戸は緑にあふれた都市だったので

す。大名たちは、自らが心血を注いで作った庭園を、当代一の画家に描かせ、その美しさを絵の中にとどめようとしてきました。かくして、庭園画は、盛んに描かれるようになりました。

一方、古来数々の名園が造られてきた関西においても、江戸時代には、社寺や文人の居宅の庭園が多数造園され、新旧さまざまな庭園が共存し、江戸とは異なる庭園文化が築かれました。公家や文人、そして画家たちは、庭園を舞台に文化的な交流を営み、そ

れを記念して絵を描いたり、憧れの文人たちの庭園での宴を描いたりして、庭園画が盛んに制作されました。

こうした状況を受け、「庭園画」は江戸絵画史のなかで一大ジャンルへと成長しました。人々を熱狂させた庭園ブームは、江戸絵画史上、傑作と称すべき「庭園画」を生み出したのです。

本展は、この「庭園画」の歴史を、江戸時代初期から幕末に至る作品を通覧することとどる、初めての展覧会となります。以下では、見所をいくつかご紹介したいと思います。

まずは、六義園や金閣寺など、今に続く東西の名園を描いた江戸時代の庭園画が一堂に会する点にご注目いただきたいです。国指定特別名勝の庭園・六義園は、年間70万人を超える人が訪れる、東京都内の人気観光スポットで

すが、本展では、十八世紀初頭の六義園を描いた作品が展示されます。狩野常信・周信・峯信《六義園図》郡山城史跡・柳沢文庫保存会、挿図1)は、六義園の園内の名勝八十八か所を描いた大作

で、時の天皇や將軍に献上された可能性もある、当時第一級の庭園画です。本展では、往時の六義園の姿を、《六義園図》によってご堪能いただけます。

次に見所となるのは、江戸時代非公開の「秘園」を描いた庭園画です。「天下一の名園」と謳われ、庭園マニアだった第11代將軍・徳川家斉に激賞された、尾張徳川家の下屋敷の庭園・戸山荘は、東京の戸山公園一带にあった広大な大名庭園で、園内には、虚構の宿



図1 狩野常信・周信・峯信《六義園図》(部分)(郡山城史跡・柳沢文庫保存会)



図2 池大雅「閑亭曲水園屏風」(静岡県立美術館)重要文化財

場町まで存在しました。戸山荘にはごく限られた人しか入れず、戸山荘を訪れることのできた幸運な武士は、その感激をスケッチにとどめたり、訪問記を残したりしています。名園にして「秘園」だった戸山荘を描いた絵は、江戸時代の人々の心をとらえたのです。本

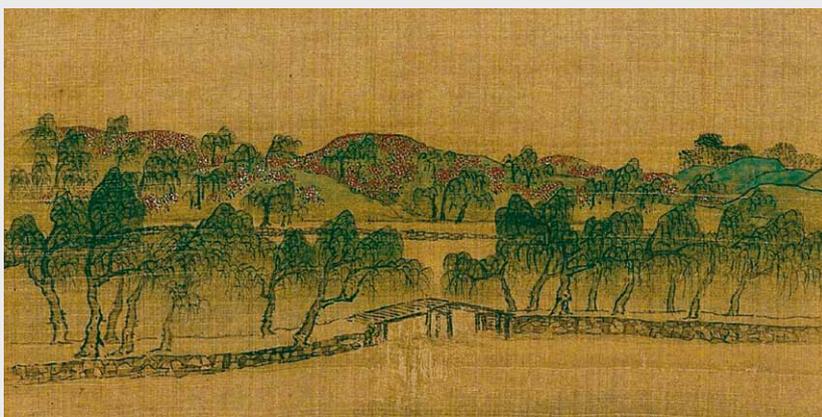


図3 谷文晁「浴恩園図記」(部分)(天理図書館)※秘蔵の名品、大注目の初公開!

展では、谷文晁「戸山山荘図稿」(出光美術館・重要文化財)をはじめとする庭園画によって、將軍や大名を魅了した江戸時代の秘園や、現在は無くなってしまった名園の魅力をご紹介します。ここまでは、江戸絵画ファンの方には、まだ「庭園画」の魅力がピンとこないかもしれません。池大雅や谷文晁は、「庭園の画家」と称すべき、庭園画を得意とした画家でした、と言われ



図4 谷文晁「公余探勝図巻」(部分)(東京国立博物館)重要文化財 Image:TNM Image Archives

たら、「庭園画」に関心を持っていただけでしょう。当時の庭園は、画家や文人の文化的な交流の舞台となり、大雅をはじめとする文人画家たちにとって、庭園を描くことは、文人との交流の記憶を絵のなかにとどめる、大事な行為でした。大雅が描いた庭園画には、日本にある現実の庭園だけでなく、中国の憧れの庭園を描いた作品があります。これらの作品は江戸絵画史を揺るがした名品ぞろいですが、これまで庭園画として認識されてこなかったため、大雅の庭園画の魅力はどこにあるのか、十分に検討されていません。本展では、大雅の庭園画がどのよ

うにして生み出されたのか、スタイルの確立する過程を明らかにすることで、その魅力に迫ります。

関西が大雅なら、関東は文晁が「庭園の画家」の代表選手と言えます。文晁は大名庭園を描くことを得意とした画家ですが、文晁の庭園画のスタイルがどのような展開を遂げたか、これまではよく分かっていません。本展では、文晁の庭園画を一堂に集めることで、その特徴を明らかにします。また、文晁の庭園画は、文晁の代表作である「公余探勝図巻」(東京国立博物館・重要文化財、挿図4)とも密接な関係にあり、今回、「庭園画と「公余探勝図巻」を同時に展示することで、江戸絵画史に大きな衝撃を与えた文晁の庭園画のスタイルがどのように確立されたか、実際にご覧いただけます。

「美しい庭園画の世界」展は、江戸絵画ファン、庭園ファン必見の展覧会です。知られざる江戸絵画のジャンル・「庭園画」の歴史を、会場でひもとき、その素晴らしさをご堪能いただきたいと思えます。芸術の秋、今年も静岡県立美術館の会場に並ぶ庭園画で、是非お楽しみください。

(主任学芸員 野田麻美)

ロダンの写真観 —マイブリッジへの見解において

上席学芸員 南 美幸

二〇一七年は、十九世紀フランスを代表する彫刻家オーギュスト・ロダン (RODIN, Auguste, 一八四〇—一九一七) の没後百年にあたる。日本国内で有数のロダン彫刻コレクションを誇る当館では、今秋、ロダンと写真の関係に焦点を当て、ロダンの芸術観や写真観を多方面から再考する小企画展を三期連続で開催する。この小論では、第一期「動き」求めて^①で取り上げる、十九世紀に静止芸術における動きを追求した写真家エドワード・マイブリッジ (MUYBRIDGE, Eadweard, 一八三〇—一九〇四) とロダンとの関係に焦点を当て、ロダンの写真観について考察する。

一般に写真の誕生は、ロダンの生まれる前年、フランソワ・アラゴ (ARAGO, François, 一七八六—一八五三) がフランスの科学アカデミーでダゲレオタイプを発表した一八三九年とされる。十九世紀に誕生したこの新しいメディアとロダンとの関係について述べる時には、歯切れが悪くなるかもしれない。なぜならば、次に述べるように、ロダンは当時写真の利用価値を最も早く認識し、かつ実際に多用した最初の彫刻家でありながら、書簡における陳述や伝記作者との対話の中では、わずかではあるが、否定的に見えてしまう表明が認められるからである。

ロダンと写真との関係を物語る証左として、現在ロダン美術館が所蔵する七千点に及ぶ写真コレクションがある。これらは、彫刻家自身が収集した風景や裸体写真のほ

か、自作を撮影させたものから構成され、端的にロダンの写真の多用を見て取ることはできる。ロダンは自らカメラを構えることはなかったものの、複数の写真家を雇って自作を撮影させ、その際にはアングルや照明など様々な指示を出して監督した。こうした彫刻写真を十九世紀末に彫刻とともに展示して以来^②、写真は出品ジャンルの一つとしてだけでなく、彫刻よりも安価で販売される作品として、さらにはロダンの名と作品を流通させるメディアとしての機能した。また、自作を撮影させた彫刻写真の上から鉛筆などで加筆や注記を加えたものは、彫刻家にとって新しいアイデアの表現や内的イメージの伝達を手助けするツールとしての役割を果たしていたと考えられる。エルセンは、「ロダンは、重要な作品が彼の思考の中で明晰になってゆく段階を記録・編集するために写真を用いた最初の彫刻家」であり、写真が可能にする「アプローチの幅広い多様性に共感していたと思われる」と述べる^③。

一方で、ロダンはある種の写真に対し疑義を投げかける。写真の特質である早さ、正確さは、彫刻での実物からの型取りと同様、彼にとっては芸術とは認められないものだった。このような表明は、一八八八年十月にカレール市長ドゥヴラン宛ての書簡に記されたもの以外^④、晩年の談話筆記にわずかに散見されるに過ぎないが、ロダン自身が語る写真観として重要である。中でも写真に対する不信は、自身の核とな

る芸術観と対照させながら、ポール・グセルによるロダンとの談話筆記の中で、以下のように顕著に示されている^⑤。

① 芸術とは生命のイリュージョンであり、これは肉付けと動勢によって得られる。

② 動勢とは一つの姿勢から他の姿勢への経過である。

③ 早撮り写真の人物は運動の一瞬を捉えたとしても突然空中で固まったように見え、芸術の動勢、すなわち動きの漸次的展開がない。芸術家が数瞬間に行われる運動の印象を作り出すことに成功したならば、その作品は、時が急停止している科学的イメージ【筆者註：写真のこと】よりも独創的である。

ロダンの言う早撮り写真とは、マイブリッジやエティエンヌ・ジュール・マレー (MAREY, Etienne-Jules, 一八三〇—一九〇四) が成功させた連続写真、すなわち運動の形態を正確に把握するために、連続した複数の瞬間を撮影した写真をさす。ゲセルとの対話でロダンは具体的な写真家や作品名を挙げていないものの、恐らくはマイブリッジをさすと思われる(図一)。というのも、一八七八年に疾走する馬の連続写真を撮影に成功したこの写真家は、その後対象を人や他の動物にも拡大して様々な動物の連続撮影に撮り組み、一八八七年にその集大成として『アニマル・ロコモーション』電氣的写真による運動の連続形態の研究』を刊行したが^⑥、その予約者名簿にロダンの名があるからである^⑦。

動きを分解し、それまで人の視覚では捉えられなかった瞬間を明示した連続写真は、芸術における動きの描写の適切さに関する論争を巻き起こした。とりわけ、連続写真に対するロダンの見解は、十九世紀の科学と芸術との対立概念、すなわち写真的事実と絵画的真実との対置として言及されてきた。早撮り写真では歩行する人間がまるで歩いていないように見えるというゲセルに、彫刻家は自らの芸術観を実現した作例として『洗礼者聖ヨハネ』（図二）を挙げる。右足を一歩踏み出しながらも、後ろの左足もしっかりと地面につけたポーズは、前進するという「一つの動きの漸次的

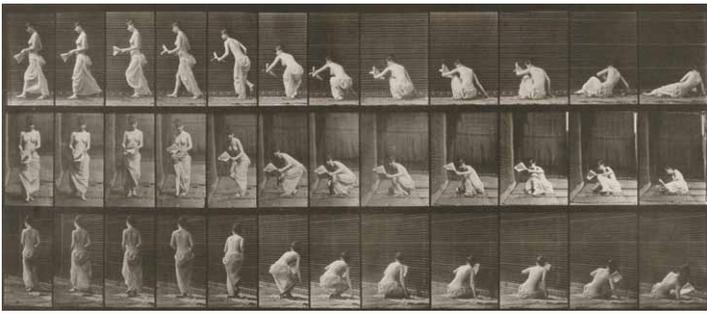


図1 エドワード・マイブリッジ《左手に新聞紙を持って地面から起き上がる（『アニマル・ロコモーション—電氣的写真による運動の連続形態の研究』より）》1887年 コロタイプ印刷 東京都写真美術館蔵



図2 撮影者不明《洗礼者聖ヨハネ》、背景に「鼻のつぶれた男」と「テイトロ」（ファクシミリ）1884年頃（原画）鶏卵紙、黒鉛で方眼線引き 当館蔵

展開を身体異なる部分軸の移動で示唆」することによって⑦、停止することのない時間の連続を表現しており、「見る人が私の彫像の一端から他端へ眼を移してゆくと、彫像の姿勢の展開してゆくのが見える」のである⑧。すなわち、ロダンのいう動勢には、連続写真にはありえない、鑑賞者の参加、そのイメージーションによる視覚が予め織り込まれている。

初めに述べたように、ロダンは当時の彫刻家の中では革新的で多様な写真の利用方法を展開しており、それは本人の言葉よりも、より深いところでの実践だった。晩年における伝記作者との対話は、活動初期から手わざとして作品に表現された芸術観を、ロダンが改めて言葉として捉え直すきっかけともなつたと考えられる。言い換えれば、文字として表現したのは伝記作者であるものの、ロダンは晩年になって言葉としての芸術哲学の形成に到つたと言えよう。従つて、談話筆記の中で表明された写

真観、自作と早撮り写真との対置は、確固たる芸術観を表明するための方策とも考えられるのである。

- 1 一八九六年二月二日（十三日にジュネーブのラート美術館で開催された、ビュヴィス・ド・シャヴァンヌ、ウジェーヌ・カリエール、ロダンのグループ展）。
- 2 1980. EISEN, Albert. *In Rodin's Studio*. Phaidon, p. 13, 26.
- 3 1977. JUDDIN, Claudie, et al. *Auguste Rodin: Le monument des Bourgeois de Calais*. Musée Rodin, Paris et Musée des Beaux-Arts, Calais, No. 61, p. 63. 《カレールの市民》の完成を急がせる市長に対し、ロダンは制作時間を十分に確保できないことは、「実物の型取りすなわち美術品を写真に替えること」であり、それは早い芸術ではなからぬ。
- 4 1911. RODIN, Auguste. *L'Art: Entretiens tenus par Paul Gsell*. Bernard Grasset, pp. 51-69.
- 5 1887. MUYBRIDGE, Eadweard. *Animal Locomotion - an electro-photographic investigation of consecutive phases of animal movement*. University of Pennsylvania, Philadelphia.
- 6 『アニマル・ロコモーション』はロダン美術館蔵書には見当たらないが、以下のマイブリッジの著書は収蔵されている。1893. MUYBRIDGE, Eadweard. *Descriptive Zoopraxography or the Science of Animal Locomotion...*, the University of Pennsylvania, Philadelphia. Inv. No. 4907. ロダン美術館のサンドラ・ブジョウ学芸員の「教示および同館ホームページによる」。 <http://musee-rodin. philly.fr/opa/>
- 7 2007. LE NORMAND-ROMAIN, Antoinette, et al. *Rodin et le Bronze*, vol. 2. Musée Rodin, Paris, p. 426. ロダンの『歩く男』の解説は、『同作が《洗礼者聖ヨハネ》の二つの習作からのアサンブラージュであり、ポーズもほぼ変わらないことから、後者にもあてはまると思われる。
- 8 1914. GSELL, Paul. (En haut de la colline). *Rodin : L'Homme & L'Oeuvre, numéro spécial de L'Art et les artistes*, Paris.

本の窓

高階秀爾著

『芸術のパトロンたち』

岩波新書（新赤版）490
一九九七年三月二十一日第一刷発行



いつの時代にも、芸術にはパトロンが必要で、作品を制作し、世に出すには金と力が必要です。本書は、そうした芸術のパトロンの歴史の変遷を記した名著です。富と権力を誇るルネサンスの王侯貴族やローマ法王庁を頂点とする教会、19世紀になって新たなパトロンとして登場した近代市民階級やジャーナリズム、あるいはコレクターや政府・企業にいたるまで、その役割を詳しく分かりやすく説明しています。

そのなかで、美術館や展覧会が果たした役割は何か？ 今日、我々が向き合わねばならない問題が浮かび上がってくるのではないのでしょうか。最後の章では、学芸員がこれから果たすべき役割についても示されており、大変興味深い一冊です。

（上席学芸員 泰井良）

山をおり、街ではたらく

主任学芸員 植松 篤

皆様、今年七月に現代美術担当の学芸員として着任しました植松篤と申します。どうぞよろしくお願いたします。これまでは鹿児島霧島アートの森という標高七〇〇mに位置する、現代美術が専門の野外美術館で働いておりました。南九州の山から日本の動脈のような東海道の要衝へ、直線距離で八〇〇km弱を旅し、この地へまいりました。

前の職場は、自然林が広がり、動植物が豊かなところでした。季節の花々が咲き、常連客にはシカがいて、時期になると渡り鳥もやって来ました。ここ静岡県立美術館も、周りには緑があつて生き物は豊富です。この文章を書いている時も、中庭に野鳥が来て、きれいな声を聴かせてくれました。ロダン館の裏手には展望が開けた場所があり、風景や自然を楽しめるおすすめのスポートです。

ところで、当館では年末に向けて、現代美術のコレクターである高橋龍太郎氏の所蔵品と館蔵品を展示する「アートのなぞなぞ—高橋コレクション展」を準備中ですが、実は前の職場でも「高橋コレクション展—マインドフルネス—」が開催されており、不思議なご縁を感じております。

現代美術と言うと、以前は難しそうない

メージが強かったかと思いますが、最近では各地で芸術祭等が開催され、楽しく、身近なイメージに変わってきたと感じています。しかし、やはり作品それぞれは、以前にもまして多種多様です。それらを、例えば技法やテーマ等の観点から整理をして皆様にお届けするのが、現代美術を専門とする学芸員の役割の一つです。現代美術の作品は、今を生きる私たちに向けて制作されたものです。中には、皆様にとって心打つような作品があるかもしれません。そうした作品にめぐり合うお手伝いができれば幸いです。



山登りが趣味です。愛鷹山から撮影しました。

利用案内

開館時間：10:00～17:30(展示室への入室は17:00まで)
休館日：毎週月曜日(月曜祝日の場合は開館、翌火曜日休館)

アクセス

- ◎JR「草薙駅」県大・美術館口から静鉄バス「県立美術館行き」で約6分
- ◎静鉄「県立美術館前駅」から徒歩約15分またはバスで約3分
- ◎東名高速道路 静岡I.C.、清水I.C.から約25分
- ◎新東名高速道路 新静岡I.C.から約25分

テレフォン・サービス：054-262-3737
ウェブサイト：http://www.spmoa.shizuoka.shizuoka.jp

無料託児サービス
毎週日曜日および祝日10:30～15:30
対象 6ヶ月～小学校就学前

※イベント等は都合により変更になる場合があります。

〒422-8002 静岡市駿河区谷田53-2
総務課/Tel 054-263-5755 Fax 054-263-5767
学芸課/Tel 054-263-5857 Fax 054-263-5742



静岡県立美術館

Shizuoka Prefectural Museum of Art

つながる、次へ

ロダン没後100年記念「ロダンウィーク」・
ロダン没後100年記念事業
イベント・スケジュール

丘の上のロダンマルシェ

11月3日(金・祝) 10:00～16:00 本館正面広場ほか 申込不要
※荒天中止
草薙マルシェ実行委員会がプロデュースするおしゃれなグルメ・雑貨市&アートパフォーマンス

タブレットでグリーティングカードづくり

11月3日(金・祝) 10:00～15:30 本館正面玄関前 申込不要
美術館友の会が企画・運営するパソコンを使ったカードづくり

青い鳥ピアノコンサート ～ロダンによせて～

11月3日(金・祝) 14:30開演 ロダン館 要入館料 申込不要
赤津ストヤーフ樹里亜によるピアノコンサート

草薙ツアーグループ「呈茶サービス」

11月4日(土) 11:00～14:00 本館正面玄関前 申込不要
美術館ボランティアによる美術館の茶畑でとれたお茶のサービス

「静岡の名手たち」ロダン賞コンサート

11月4日(土) 14:30開演 ロダン館 要入館料 申込不要
AOIロダン賞受賞者による箏、サクソフォンの演奏

ギャラリートーク

11月5日(日) 11:00～ ロダン館 要入館料 申込不要
静岡大学の学生によるロダン作品の解説

ロダンのいたパリ～音と光のコンサート～

11月5日(土) 14:00開演 ロダン館 要入館料 申込不要
イメージ映像と楽しむ静岡大学の教員によるピアノコンサート

特別講演「ロダンとカミーユ・クローデル—二人の愛と彫刻作品」

11月17日(金) 14:00～ 講堂 申込不要
芳賀徹名館長による講演

若村麻由美の劇世界「ワルツ～カミーユ・クローデルに捧ぐ～」

11月18・19日(土)・(日) 18:30開演 ロダン館 全席指定・事前販売
カミーユ・クローデルを題材にした朗読劇

友の会のご案内 入会は常時受け付けています。会員特典など詳細は、友の会事務局(Tel.054-264-0897)にお問い合わせください。